

## 「神戸高校に赴任して」

県立神戸高等学校長  
新谷 浩一

### ○ むかしむかしのお話

その坂にはじめて足を踏み入れたのは今から20年以上も前のこととなります。2系統のバスを降りると、目の前に聳えるのは話聞いたことのある地獄坂。一步一步が重く感じられたのは傾斜のせいばかりではありません。当時の私は学校現場から県教育委員会の指導主事に転出したばかりのルーキーで、それにもかかわらず国事業のスーパーサイエンスハイスクールに選ばれた神戸高校を担当する役割を課されていたからです。知識もキャリアも、すべてが足りない私です。



それでも、始める前から「できません」というのはご法度です。任された以上、やりきるのが当然のことでした。しかも上司であった岡野幸弘課長は当時30代半ばだった私に同じ言葉を繰り返し唱えてくれました。

「学校の先生方はみんな必死に頑張っているんです。あんたはその先生方を指導しないといけない立場になった。それなら出会う先生方から『ああ、こいつはちょっと違うな。こいつの話なら聞いてもいいか』そう思われる存在にならないと駄目ですよ。『県教委と言ったって、この程度か』先生方にそう見下されたら私たちの存在に意味なんてありません。しっかり勉強して、成長しなさい。あんたには格好いい指導主事になってほしいんです」 やるしかないよな。岡野先生の言葉を頭の片隅に置きながら、地獄坂を何度も上った平成16年。

### ○ ちょっとむかしのお話

季節が流れ、平成21年4月に本校17代校長となられ、3年間在任した岡野先生は退職後、大学教授となられました。やがて体調を崩されて入院。お見舞いに伺いたいと願いましたが叶いませんでした。誰にも出会いたくない、とのことでした。「弱っている自分を見せたくはないという思いらしい」そう人づてにお聞きしました。ある意味、そのお蔭でもあります。私の中の岡野先生は今もおしゃれで格好いい姿のままです。

結局、大学教授の職のまま逝去された岡野先生ですが、研究室には実に多くの資料を残しておられました。後任の方のご厚意で私はその資料を譲り受けることができました。その多くは神戸高校の校長時代の式辞原稿です。デジタル活字の紙面のところどころ、癖の強い岡野先生の字が書き足してあります。涙が出ました。

その原稿の中の1枚は、平成23年の東日本大震災直後の終業式で生徒たちに語りかけた日のものでした。「テレビの映像を見て、皆さんは何を思いますか。『大変だな』という感想だけですか。今、日本は未曾有の国難に直面しています。今こそ私達の英知を結集して、この困難に立ち向かわねばなりません。これは1年、2年という問題ではありません。恐らくこの先何年もかかって再建していかねばならない問題です。皆さんは復興を担う第二、第三の世代となるでしょう。そのためには皆さんは今、力を蓄える時です。しっかりと勉強をし、しっかりと人格を磨き、第一線に躍り出たときには十分な力を発揮できるようにしてもらいたい」

### ○ そして今

令和7年4月、私は22代校長として本校で働くこととなりました。赴任する1週間前、久しぶりに地獄坂を上り、校長室に入りました。窓の向こうから時折、歓声が聞こえます。見下ろすと入学準備のために登校した新1年生を上級生がお見送りするところでした。部活動の勧誘のために、リボンで円を描いてつくったビラの首飾りが上級生から新1年生にかけられていきます。先輩から後輩へ、まるで思いを繋いでいくように。その時はじめて、私は自分が神戸高校に勤める意味が少し解った気がしました。



「岡野先生。あなたがかつて見ていた景色を自分も見ることができるとは思ってもいませんでした。それでも明日からあなたの愛した神戸高校の生徒たちと向き合うことになりました。先生方とともに私も精いっぱい生徒たちを大切にしようと思います。どうか見守っててくださいね」

出会えた意味、託された思いを噛みしめて日々を過ごします。どうぞよろしくお願ひいたします。

